国立国語研究所学術情報リポジトリ

Negation -nai and -n in Taiwan Japanese : The case of Hualien prefecture

メタデータ	言語: jpn
	出版者:
	公開日: 2019-03-25
	キーワード (Ja):
	キーワード (En):
	作成者: 簡, 月真, CHIEN, Yuehchen
	メールアドレス:
	所属:
URL	https://doi.org/10.15084/00002161

『日本語科学』20(2006年10月) 5-25 [研究論文]

台湾残存日本語にみられる否定辞「ナイ」と「ン」
―― 花蓮県をフィールドに ――

簡　月真
(台湾国立東華大学)

キーワード
旧統治領の日本語，リンガフランカ，方言的要素，言語接触，体系の再編成

要　旨
花蓮県在住の8人の自然談話データを分析した結果，その日本語には西日本方言の要素が取り込まれ，否定辞にはナイとンの使用が観察された。一段・カ変・サ変動詞ではナイが専用されているが，五段動詞ではナイとンの両方がみられる。ンは五段動詞の中では特にラ行に使われやすい。個人間の使用実態から，ナイとンが競り合った結果ンは消滅に向かうことがわかり，ンが使用されなくなる順は「一段・カ変・サ変動詞→ラ行以外の五段動詞→ラ行五段動詞」であると推測される。また，日本語がリンガフランカとして用いられるドメインではンの使用がみられ，日本人調査者と話すドメインになるとナイへの切換えが行われることからは，ンがもともと持っていた方言的性質がインフォーマル形式に転換し活用されていることがわかる。そういった切換え能力の有無はインフォーマントの日本語能力とかかわっている。ンは台湾で独自の体系を発達させているのである。

1. はじめに

台湾では，植民地時代に日本語教育を受けた世代が現在も日本語を流暢に話す。その日本語を観察していると，下記の発話例[1]に示すような，西日本の方言的要素が頻繁に用いられていることに気付く。

(1) K：今，家<u>オルチガウ</u>？
　　O：<u>オラン</u>。

台湾の高年層が話す日本語は，1895年から1945年までの50年にわたる日本による台湾植民地統治の結果もたらされたものである。日本の敗戦とともに日本人は日本に引き揚げたが，日本語だけは台湾に残された。その中で同じ意味を表す標準語形と方言形はどのような形で存続しているのだろうか。地域性を帯びた要素がその母語話者の手から離れて外国で生き延びる時どのように変容するのか，言語接触の観点から見てたいへん興味深い課題である。

台湾残存日本語の中に方言的要素がみられることについては，前田(1989)や酒井(1996)で指摘されたことはあるが，体系的な記述はまだなされていない。また，これまで世界各地で行われて

きた言語接触をめぐる研究でも，台湾残存日本語のような長きにわたってリンガフランカとして用いられてきた第二言語を対象に，その中にみられる標準語形と方言形について論じられた例はない。

そこで本稿では，世界的にも貴重なケースである台湾残存日本語を取り上げ，方言的要素の変容の様相を明らかにすることを試みる。具体的には，８人のインフォーマントによる自然談話に基づき，その中でも特に変容のあり方に特徴が顕著な否定辞に焦点をあてて考察する。

以下，まず第２節で植民地時代の台湾在住日本人の人口構成を説明し，第３節で本稿で対象とするインフォーマントたちの言語生活において日本語がどのような位置にあるのかについて述べる。第４節で調査の概要について説明する。続いて本題に入り，第５節で台湾日本語にみられる方言的要素を概観し，第６節で否定辞について分析，考察を加える。そして，第７節ではまとめと今後の課題を述べることにする。

2. 台湾に在住した日本人の人口構成

台湾は，1895年に日清講和条約の締結によって清から日本に割譲され，1945年までの半世紀にわたって日本の統治下に置かれた。その間，日本人の移民が進み，1935年には日本人の人口は台湾の全人口5,212,426人中270,584人で約５％を占めていた（台湾総督官房臨時国勢調査部1937）。

そのうち，約70％の人が西日本出身者であった。表１（次ページ参照）は，1935年当時の状況をまとめたものであるが，人数の多い順に，鹿児島，熊本，福岡，広島，佐賀，長崎，山口となっている。この上位７県はすべて西日本にあり，その人数は日本人全体の約46％（125,336人）を占めることが確認できる。

台湾高年層に対する聞き取り調査からも，かつては西日本出身の教師や隣人（製糖会社，鉄道部などの宿舎，移民村などの日本人）との接触があったことがわかる。

3. 現在における日本語の使用状況

植民地統治によって台湾に持ち込まれた日本語は現在どのように使用され，日本語教育を受けていた世代の現在の言語生活においてどのような位置を占めているのか見てみよう。

台湾は，アタヤル語・アミ語・カバラン語・サイシャット語・サオ語・タオ語・タロコ語・ツォウ語・パイワン語・ブヌン語・プユマ語・ルカイ語といった原住民族諸語や閩南語，客家語，北京語などが話される多言語国家である。言語集団や地域などによって，人々の言語生活に差異があると考えられるが，ここではケーススタディーとして台湾東部の花蓮県にある農村に住む高年層を取り上げる（調査の概要は第４節を参照）。

表１　台湾在住の日本人の出身地（1935年当時）

順位	出身地	人数	割合	順位	出身地	人数	割合
1	鹿児島	34,681	12.8（%）	25	岐　阜	3,240	1.2（%）
2	熊　本	29,303	10.8	26	長　野	3,056	1.1
3	福　岡	16,490	6.1	27	石　川	2,988	1.1
4	広　島	12,002	4.4	28	和歌山	2,893	1.1
5	佐　賀	11,407	4.2	29	京　都	2,634	1.0
6	長　崎	10,761	4.0	30	千　葉	2,553	0.9
7	山　口	10,692	4.0	31	徳　島	2,534	0.9
8	沖　縄	9,931	3.7	32	三　重	2,353	0.9
9	大　分	9,136	3.4	33	山　形	2,242	0.8
10	東　京	9,036	3.3	34	福　井	2,220	0.8
11	宮　城	7,677	2.8	35	鳥　取	2,210	0.8
12	新　潟	6,664	2.5	36	神奈川	2,200	0.8
13	宮　崎	6,620	2.4	37	滋　賀	1,933	0.7
14	愛　媛	5,956	2.2	38	群　馬	1,891	0.7
15	兵　庫	5,618	2.1	39	富　山	1,813	0.7
16	大　阪	5,563	2.1	40	栃　木	1,786	0.7
17	岡　山	5,127	1.9	41	北海道	1,699	0.6
18	愛　知	4,432	1.6	42	山　梨	1,628	0.6
19	高　知	4,245	1.6	43	埼　玉	1,494	0.6
20	福　島	3,744	1.4	44	秋　田	1,362	0.5
21	静　岡	3,613	1.3	45	岩　手	1,329	0.5
22	島　根	3,439	1.3	46	奈　良	1,101	0.4
23	茨　城	3,376	1.3	47	青　森	582	0.2
24	香　川	3,304	1.2		合　計	270,558	100（%）

＊表は台湾総督官房臨時国勢調査部（1937）『昭和十年国勢調査結果表』に基づいて筆者が作成した。

話者・EGL・年齢・性 ＼ ドメイン		配偶	兄姉	弟妹	子供	ま ご	同高	異高	同中	異中	同若	異若	祈り	暗算	買物
Y	アミ・80・女	☆	○	○	○	◎	○	★	○	✪	◎	●	○	＊	✪
T	アミ・78・男	☆	☆	☆	○	◎	○	★	○	✪	◎	●	☆	＊	✪
K	アミ・69・男	☆			○	○	○	✪	○	✪	◎	●	○	○	❖
C	閩南・77・男	☆	○	○	○	◎	☆	★	○	✤	○	●	○	☆	◐
L	閩南・72・女	☆	○	○	○	◎	○	★	○	○	◎	◎	○	☆	○
S	閩南・70・男		☆	○	○	○	○	※	○	❖	○	◎	○	＊	○
H	客家・70・女	○	○	○	○	●	○	★	○	●	●	●	○		●

＊EGL は ethnic group language の略。
＊表では話者を EGL 別に年齢の高い順に並べた。
＊年齢は2003年現在。
＊ドメインは Fishman（1964）において提唱された「参与者」「場所」「話題」の３つの要素から成り立つ抽象的な概念である。表中の「配偶」は配偶者，「同高」「同中」「同若」は同じ EGL を話す高／中／若年層隣人，「異高」「異中」「異若」は異なる EGL を話す高／中／若年層隣人のことを指す。

凡　例	
母語（ア／閩／客）	○
北京語	●
日本語	★
母＞北	◎
母＞日	☆
日＞母	＊
日＞ア	※
北／日	✪
北／閩	◐
北／日／ア	❖
北／日／閩	✤

母：母語（＝EGL）
ア：アミ語
閩：閩南語
日：日本語
＞：前者を多用
／：併用

図１　インフォーマントの言語生活

対象とする農村は，アミ人が約80%を占めており，そこに閩南人や客家人が混ざり住んでいる。そのため，異なる言語集団の高年層の間の接触が非常に頻繁に起こっており，リンガフランカとしての日本語が日常的に使用されているのが観察される。

現地調査では「〈配偶者〉と話すときは何語を使っているか」といった質問を行って，話者の言語使用意識を聞いた。図１（前ページ参照）はそのうちの７人から得た回答をまとめたものである。

図１から，インフォーマントの日常生活において日本語の使用（★☆＊※✪❖✤で示している）は

(a)〈母語を異にする高年層隣人〉・〈母語を異にする中年層隣人〉・〈買物〉といった異なる言語集団の高年層・中年層との接触場面

(b)〈配偶者〉・〈兄姉〉・〈弟妹〉のような家族との会話

(c)〈祈り〉・〈暗算〉といった心内発話

にみられることがわかる。

(b)(c)について，インフォーマントの内省報告によると，〈配偶者〉・〈兄姉〉・〈弟妹〉が日本語ができる場合，母語と日本語を混ぜて使うことがあり，特に周りに知られたくない内緒ごとを話し合うのに日本語を用いるという（図には示していないが，同級生や友人との会話で日本語が使われることもある）。また，暗算を日本語で行うのは，九九が日本語でインプットされたためであろう。祈りの場合に日本語が使われるのは，教会で日本語の聖書が使用されていた／いることとかかわっていると思われる。

(a)については，母語を異にする中高年層同士の接触場面では，現在の公用語の北京語が苦手でお互い相手の母語が話せないため，あるいは，一方は北京語が話せるが他方は北京語が話せないため，意思疎通の手段として日本語が用いられているのである。すなわち，この村の高齢者の間では日本語はリンガフランカとしての役割を果たしているといえる。

1945年，日本の敗戦とともに北京語が日本語に取って代って「国語」となり，1947年の２・28事件（戦後台湾にわたってきた国民党政権による，従来から台湾に在住していた住民の弾圧事件）以後は，日本語の使用が全面的に禁止された（1993年解禁）。そして，1971年，中央政府から花蓮地方政府あてに「日本語を制限して北京語を普及させるよう」との通達が出される（『省公報春53期』）など，日本語使用の取り締まりが行われた。しかし，これは，通達が必要なほど日本語が使われていたということでもあり，また，そのような取り締まりにもかかわらず，日本語は今日に至るまで使い続けられてきたのである。その使用は一人や二人といった個人レベルではなく，グループレベルで広範囲にわたって行われている。これは，日本語がリンガフランカとしての役割を持っているからだと考えられる。つまり，日本語が現在まで生き残ったのは，日本語を必要とする人々がいたからなのである（詳細は簡2005を参照されたい）。

4. 調査の概要

台湾に残存する日本語にはさまざまなバリエーションがみられ，一見混沌としている。その多

様性の中から規則性を見出すために，バリエーション理論の考え方（Weinreich et al. 1968など）を参考に，話者間の違い，および，話者個人内のスタイルによる違いという２つの側面からのアプローチを用いて調査を行うことにした。話者間の違いについては日本語能力レベルが異なるインフォーマントを取り上げ，話者個人内のスタイルによる違いに関しては異なるドメインにおける談話データを用いて考察していく。

調査の概要を簡単に説明すると，次のようになる。まず，フィールドとして，リンガフランカとしての日本語が頻繁に使用されている花蓮県を選んだ。本稿では，1999年12月から2003年２月にかけて８回にわたって収録された８人の談話を分析データとして用いる。現地調査にあたっては，次の２つのドメインにおける自然談話を録音した。

〈LF ドメイン〉：母語を異にするインフォーマントが会話する（日本語がlingua francaとして用いられる）ドメイン[2]

〈NS ドメイン〉：日本語 native speaker の調査者がインフォーマントに対して面接調査を行うドメイン[3]

〈LF ドメイン〉がインフォーマントたちの言語生活においてどのような位置にあるかについては前節に述べたとおりであるが，〈LF ドメイン〉で用いられている日本語の特徴を浮き彫りにするために外部から来た初対面の日本人調査者と話す場合との比較が有効ではないかと考え，〈NS ドメイン〉を設定したのである。また，この２つのドメインでの談話を収録したのは，話者内部にみられる日本語のスタイルの違いを捉えるためでもある[4]。

インフォーマントの属性および談話情報は表２（次ページ参照）のとおりである。表２ではインフォーマントを日本語の会話能力[5]の高い順に並べた（ただし，C・S・K はほぼ同じレベルで，O・L・H もほぼ同じレベルである）。

5. 方言的要素の使用

調査で得られた談話データからは方言的要素の使用が多く見出された。発話例をいくつか見てみよう。

(2) L：あの，病気の関係か，以前コケタ[転んだ]の関係治療してないの関係。〔LF 談話 LY〕

(3) H：自分あれご飯あればすこし野菜炊イタラもう，もう上等，ん。〔LF 談話 HW〕

(4) Y：すこーしだけ。足ラナイ[足りない]よ。〔LF 談話 LY〕

(5) T：えー，最初ここチガウ[ここではない]よ，最初から。〔LF 談話 CT〕

(6) K：今，家オルチガウ[いるのではないか]？

O：オラン[いない]。（＝(1)）〔LF 談話 KO〕

コケル，（野菜を）炊ク，足ル，オル，否定形式チガウ，確認要求の（ト）チガウ，否定辞ンなど西日本方言的な語彙や文法形式が用いられているのだが，これは，台湾に移住した日本人に鹿児島や熊本，福岡など九州をはじめとした西日本出身者が多かった（第２節参照）ことの影響

であろう。

台湾在住の日本人の話す日本語には方言が混ざっており，特に西日本方言の要素が顕著にみられる，そしてその使用は台湾人の日本語にまで影響を及ぼしている，といった指摘が西岡(1936)，斉藤(1939)，都留(1941)，川見(1942)など植民地時代の文献にみられる。台湾人は教科書で標準語を学びながら，西日本出身の日本人との接触によって方言形式も身に付けたことは間違いないであろう。

では，標準語と方言という2つの言語変種が台湾人の手に渡って半世紀以上経った現在，それらはどのように変容しているのだろうか。以下では，変容のあり方に特徴が顕著な否定辞を取り上げて考察を行うことにする。

表2　インフォーマントおよび談話情報

イン*1	EGL*2	性別	生年	日本語学習歴*3	談話情報*6			
					LFドメイン(データ量)		NSドメイン(データ量)	
T	アミ語	男	1925	公学校6年，高等科2年，青年学校2年	〔LF談話CT〕	100分	〔NS談話T〕	55分
C	閩南語	男	1926	公学校6年	〔LF談話CT〕	100分	〔NS談話C〕	60分
S	閩南語	男	1933	小学校3年，国民学校3年*4	〔LF談話SN〕	50分	〔NS談話S〕	75分
K	アミ語	男	1934	国民学校5年	〔LF談話KO〕	100分	〔NS談話K〕	50分
Y	アミ語	女	1923	国語講習所(夜間)1年	〔LF談話LY〕	140分	〔NS談話Y〕	30分
O	ブヌン語	男	1942	なし(自然習得)*5	〔LF談話KO〕	100分	〔NS談話O〕	105分
L	閩南語	女	1931	国民学校6年	〔LF談話LY〕	140分	〔NS談話L〕	30分
H	客家語	女	1933	国民学校5年	〔LF談話HW〕	40分	〔NS談話H〕	40分

*1 インはインフォーマントの略称である。Oを除くすべてのインフォーマントが同じ集落に住んでいる隣人同士である。Oはブヌン人が多く在住する別の村に住んでいるが，Kのネットワークに属する親友で同じく花蓮県に住んでいることから，本稿の分析対象に入れることにした。なお，T・K・Yは対象とするフィールドで生まれ育ち，Sは青年の頃に近くの村から移住してきた。C・Lは30代の頃に彰化県から，Hは40代の頃に苗栗県から移住してきた。

*2 EGL：ethnic group languageの略。

*3 主に日本人を対象とする初等教育は小学校，台湾人を対象とする初等教育は公学校によって行われていたが，台湾人が小学校に入学することもあった。小学校と公学校は1941年に国民学校と改称された。また，高等科は6年制公学校（国民学校）を終えた人が進学できる学校教育制度であり，青年学校と国語講習所は社会教育機関である。

*4 インフォーマントSは父親が製糖会社に勤務していたため，小学校への入学が可能だった。しかし，いじめに遭ったり喧嘩を繰り返したりしていたため，4年生から台湾人向けの学校に転校した。

*5 インフォーマントOは学校教育を受けていないが，親世代の影響や社会生活を営む中で日本語を聞いて自然習得した。また，幼い頃に日本人と接触したことがある。

*6 談話情報について，例えば〔LF談話CT〕は，〈LFドメイン〉におけるCとTによる談話を示す。なお，〔LF談話SN〕と〔LF談話HW〕では，NとWはアミ人女性（1925年，1921年生まれ）である。調査期間中にNとWの〈NSドメイン〉における談話が収録できなかったため，今回は分析の対象としなかった。

6. 否定辞

まず6.1節で否定辞の使用状況を整理する。次に，ンとナイの使用をめぐる規則性について考察する。具体的には6.2節では動詞の活用の種類による使い分けを整理し，続く6.3節ではドメイン間，6.4節ではドメイン内における切換えのあり方について分析する。そして，6.5節ではインフォーマントが否定辞ナイとンをどのように捉えているのかを見ることにする。

6.1. 否定辞の使用状況

分析に入る前に，まず，インフォーマントの否定辞の使用能力について概観し，否定辞の使用状況の全体像を把握する。

6.1.1. 否定辞の使用能力

動詞の打ち消しの形は標準語では未然形に接尾辞「ナイ」をつけて作られるが，このようなルールはインフォーマント８人すべての使用に確認できる。誤用だと思われる使用は以下の２例のみである。

(7) K：あれ[北京語]，あんまり，私はシャベナイ {笑}。 〔NS 談話 K〕

(8) L：[略]十二時はまだ人[客が]ポンポン[とドアを叩く]。まーだ起キラナイ[と]どうする。ah goan のしゅうじん[私の主人]みんなみんな十，十時までから[店を]閉めるよ。うるさい。寝たらまだおき，いく，起きる。 〔LF 談話 LY〕

発話例(7)ではシャベルを一段型の，(8)では起キルを五段型の動詞として扱っていると思われる。いずれも語の活用範疇に関する誤用である。しかし，このような使用はわずか２例で，生産的に使用されているわけではないので，単に一時的なパフォーマンスエラーであると考えられる。したがって，インフォーマント８人は動詞の否定形式を派生する能力を持っていると言うことができる。

ちなみに，インフォーマントの否定辞の運用としては，

(a) 標準語形ナイが用いられる
　例：許サナイ・ワカラナイ・言エナイ・来ナイ・シナイ

(b) 方言形ンが用いられる
　例：炊カン・話サン・飲マン・取ラン・言ワン

(c) 西日本方言の表現法が標準語形ナイに単純置換されて用いられる
　例：足ラナイ・カマナイ[「カマン」で「かまわない」の意]・飲マナイトイカナイ・見テイカナイ・逃ゲナイデイイ

(d) 方言形ンが標準語形ナイと混合して用いられる
　例：探サントイカナイ，払ワナイトイカン

などが観察される。

これらの使用実態から，標準語形ナイと方言形ンが接触して，競り合っている様相をうかがうことができる。

6.1.2. 否定辞の使用の実態

ここで，〈LF ドメイン〉と〈NS ドメイン〉で収録した自然談話から見出された否定辞を整理しておく。表 3 に，動詞否定形式や当為表現など否定辞を含む表現の使用数をまとめた。

表 3　否定辞の使用実態

	T		C		S		K		Y		O		L		H		計
	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	
ン	40	10	0	0	28	16	11	0	26	6	11	34	0	0	50	20	252
ナイ	48	38	52	32	35	44	41	18	70	23	53	117	112	37	24	7	751
ンデス	0	3	0	0	0	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	4
ナイデス	0	2	2	5	0	0	0	4	0	0	0	0	0	0	0	0	13
マセン	0	3	0	2	0	10	0	5	0	0	0	0	0	0	0	0	20

*表は，過去・非過去の区別なく集計してある。
*直接引用に現れたものは省いた。それは，ドメインによる使い分けを見るためである。
*アスペクト否定表現はすべて「テ（イ）ナイ」が使用されており，ン／ナイの対立がみられないため，今回の考察の対象からは外し，表には含めなかった。
*TとSには方言形「～キラン」の使用がみられる（T：〈LF ドメイン〉1例，S：〈LF ドメイン〉1例・〈NS ドメイン〉3例）。「入リキラン」「言イキラン」などのような使用である。この「～キラン」は九州北東部において心情・能力可能を表す形式であるが，「～キラン」には「～キラナイ」との対立がない。インフォーマントの使用にも「～キラナイ」がみられず，ン／ナイの対立の有無が確認できない。したがって，「～キラン」を考察から外すことにする。

表 3 から，否定辞については，方言形ン・ンデス，および標準語形ナイ・ナイデス・マセンが用いられていることがわかる。その考察にあたっては，

(a) 方言形の否定辞ンと，標準語形の否定辞ナイをどのように使い分けているか
(b) 普通体の否定辞（ン・ナイ）と丁寧体の否定辞（ンデス・ナイデス・マセン）をどのように使い分けているか

という 2 つの観点があるが，(b)については丁寧さとのかかわりで論じるべきものであり，本稿では(a)にしぼって論を進めることにする。

表 3 の「ン」と「ナイ」に焦点をあてて見ると，インフォーマントには，方言形ンをまったく用いない人と，方言形ン・標準語形ナイを併用する人があり，個人差が著しいことがわかる。すなわち，インフォーマントは「ナイ専用型」と「ナイ・ン併用型」に分けられる。

「ナイ専用型」：C・L
「ナイ・ン併用型」：T・S・K・Y・O・H

「ナイ専用型」のCとLは，専ら標準語形ナイを用いている。例えば，下に挙げる発話例のように，「オル」の否定形に「オラナイ」が用いられており，また，方言の表現法「カマン」（かまわないの意）もすべて「カマナイ」に置き換えられている。

(9) C：校長が，台中のほうへー会議行って，オラナイ。　〔LF談話CT〕
(10) L：え，カマナイ。あ，あれもう過ぎたのことから。　〔LF談話LY〕

この「オラナイ」と「カマナイ」は，

ン ： ナイ ＝ カマン ： 《カマナイ》

のように，「ン→ナイ」の対応置換によって作り出されたものであろう。

こういった「オラナイ」「カマナイ」の使用に加え，CもLも複数の西日本の方言形式（例えば，コケル・炊ク・ヤワイ・足ルなど）を用いていることから，この2人はかつて方言形ンにも接したことがあると推測される。しかし，現在ではナイのみを使用している。これは，同じ意味を表す複数の形式（この場合はンとナイ）を一つ（ナイ）に収斂するといった単純化の結果と考えられる。

では，「ナイ・ン併用型」のインフォーマントは，ンとナイをどのように使い分けているのか，以下では，ンとナイの使用にかかわる言語内的制約条件，および，言語外的制約条件について考察する。

6.2. 動詞の活用の種類による使い分け

まず，「ナイ・ン併用型」のインフォーマントにおけるンとナイの使用に関する言語内的な制約条件について検討する。

「ナイ・ン併用型」におけるンの使用は動詞の活用の種類によって明らかな偏りがみられる。〈LFドメイン〉〈NSドメイン〉における「ナイ・ン併用型」T・S・K・Y・O・Hの否定辞の使用を動詞の活用の種類別にまとめると，表4のようになる。

なお，五段動詞には評価を表す「カマン」「イカン」や当為表現「～トイカン」「～テイカン」といった方言の慣用表現に用いられる動詞も含まれている。西日本方言の場合これらは「カマナイ」「イカナイ」になることはないのであるが，台湾日本語の場合「カマナイ」「イカナイ」の使用が広く観察され，ン／ナイの対立が認められる。これは台湾日本語の特徴と言えよう。以下の分析では「カマン」「カマナイ」「イカン」「イカナイ」のような，ンとナイとの2つの対立項を持つものも分析対象に加えることにする。

表4　「ナイ・ン併用型」の否定辞使用

	一段・カ変・サ変動詞	五段動詞
ン	0（ 0%）	252(54.4%)
ナイ	307(100%)	211(45.6%)

*数字は使用数（使用率）。

表4からは，

(a) 一段・カ変・サ変動詞の場合，ナイは使われるが，ンは使われない
(b) 五段動詞の場合，ナイとンが両方使用されている

の2点が指摘される。

言い換えれば，ンの使用は五段動詞に限られるのである。これは「ナイ・ン併用型」のT・S・K・Y・O・Hに共通してみられる特徴で，たいへん興味深い現象である。

では，なぜこのような現象が生じたのだろうか。

まず，インフォーマントたちが最初から，一段・カ変・サ変動詞にナイを，五段動詞にンを用いるということを習得した可能性が考えられる。しかしながら，1936年『全国小学児童綴方展覧会』に収録された台湾の児童の作文には，「帰ラン」「カケン」などのように，動詞の活用の種類に関係なく否定辞ンの使用が観察される。また，台湾人の日本語には「出ンクナル（「出なくなる」の意)」の使用が広く観察される（都留 1941；川見 1942）といった記述もある。こうしたことを考えると，インフォーマントはかつて日本人から一段・カ変・サ変動詞にもンを用いるとのインプットを受けて習得し，使用していた可能性がきわめて高い。現に直接引用では一段動詞にンが使われた使用例が3例あった（すべて「テクレンカ」の使用である）が，そのことはこの解釈をさらに補強する材料となろう。発話例(11)および(12)を参照されたい。

(11) S：[略]「おい，頼むから，li[あなた]行ってね，goaー[私]，二百グラムぐらいの油買っ買ッテクレンか」[略]。〔LF談話SN〕

(12) S：[略]時々帰ってきたら「おーお父さんこれ教エテクレンかー」って。〔NS談話S〕

したがって，インフォーマントたちは教科書からすべての動詞にナイを用いるということを学び，日本人との接触でンの使用を習得していたが，ナイとンが併用される過程で，棲み分けが生じ，現在では，

〈一段・カ変・サ変動詞〉：〈五段動詞〉＝〈ナイ専用〉：〈ナイ・ン併用〉

になったと考えることができる。

これは，半世紀以上前に台湾に持ち込まれた方言形ンと標準語形ナイが日本人の手を離れてその使用を台湾の人々に任せた結果，「一段・カ変・サ変動詞でナイを専用，五段動詞でナイ・ンを併用」という再編成が行われ，それぞれの守備範囲を持ちつつ併存するようになったのだと考えられる。なお，一段・カ変・サ変動詞がンを嫌う理由については明らかではない[6]。

6.3. ドメインによる切換え

以上，一段・カ変・サ変動詞においてはナイがカテゴリカルに使用されているのに対し，五段動詞においてはンとナイがバリアブルに使用されていることが明らかになった。では，五段動詞におけるンとナイの使い分けにはどのような制約条件がみられるのかを検討してみよう。

まず，〈LFドメイン〉と〈NSドメイン〉との間における切換えについて考察する。

五段動詞におけるンとナイの使用頻度をまとめたものが表5（次ページ参照）である。

表5から，次のことが読み取れる。

(a) Kは〈LFドメイン〉ではンを用いているが，〈NSドメイン〉になるとンを使わなくなる。

表5　五段動詞におけるンとナイの使用実態

	T		S		K		Y		O		H		計
	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	
ン	40	10	28	16	11	0	26	6	11	34	50	20	252
ナイ	17	13	13	18	19	11	28	6	28	46	11	1	211
ンの使用率(%)	70.2	43.5	68.3	47.1	36.7	0	48.1	50.0	28.2	42.5	82.0	95.2	54.4

*ン・ナイの項の数字は使用数。

(b) TとSは〈LFドメイン〉ではンの方を多く使っているが[7]，〈NSドメイン〉になるとンの使用が減少する。

(c) Yは2つのドメインともほぼ似たような比率でンとナイを用いている。

(d) OとHは〈NSドメイン〉の方がンの使用率が高い。ただし，Hは両ドメインともンを多用しており，Oはンの使用率がHより低い。

この結果から，程度の差こそあれ，K・T・Sは〈LFドメイン：ン〉〈NSドメイン：ナイ〉という切換えを行っているが，Y・O・Hにはそうした切換えはみられない，とおおまかにまとめることができる。

ドメインによってンとナイを切換えるインフォーマントのうち，特にKは〈NSドメイン〉においてンを一切使用しなくなっている。Tについては，表6に示すように，〈NSドメイン〉におけるンの使用（10例）のうち，「ワカラン」が9例を占めている。ここから，Tの〈NSドメイン〉におけるンの使用は語彙的な問題であると指摘でき，Tはナイへの切換えを行っていることが確認される。

表6　〈LFドメイン〉と〈NSドメイン〉におけるワカラン／ワカラナイの使用数

	T		S		K		Y		O		H	
	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS	LF	NS
ン	40	10	28	16	11	0	26	6	11	34	50	20
(ワカラン)	(15)	(9)	(5)	(3)	(1)	(0)	(21)	(6)	(2)	(34)	(10)	(15)
ナイ	17	13	13	18	19	11	28	6	28	46	11	1
(ワカラナイ)	(3)	(4)	(0)	(4)	(0)	(0)	(4)	(5)	(3)	(15)	(0)	(0)

Sには次のような自己訂正（書カン→書カナイ）がみられる。

(13) NS：おじさんは，ひらがなもカタカナもすらすら書けるんですか。
S：わー，当時，このダブダ[ラブレター]書くの一流ですよー。{笑} ダベタ[ラブレター]。{笑} 結局ね，これなげー[「長いこと」にも聞こえた]書カントネ，書カナイト，言ワナイトネ，もうみんなほとんど忘れてますよ。〔NS談話S〕

こうしたことから，〈NSドメイン〉においてK・T・Sが考えているターゲット形式は否定辞

ナイを含む形式であると推測できる。

では，なぜ〈NS ドメイン〉になると否定辞ナイへの切換えが行われるのか。インフォーマントたちにとって，否定辞ンはどのような待遇価値を持っているのか。この問題については，6.5 節で論じる。

なお，使用率こそ異なるが，Y・O・H は〈NS ドメイン〉の方がンの使用率が高く，一見〈NS ドメイン〉になるとンへの切換えが行われたように見受けられる。しかしながら，〈NS ドメイン〉でのンの使用状況を詳細に検討すると，この見方は否定される。表 6 を見ると，Y・O の〈NS ドメイン〉におけるンの使用は，「ワカラン」のみである。H も使用例20のうち「ワカラン」が15例である。Y・O・H の〈NS ドメイン〉におけるンの使用率の高さは「ワカラン」を多く用いることによる，語彙的な問題なのである。

6.4. ドメイン内にみられる切換え

上に述べたようなドメイン間切換えの有無にかかわらず，「ナイ・ン併用型」のインフォーマントは一つのドメイン内でンとナイの両方を用いている。そのンとナイはどのように用いられるのだろうか。その使用をめぐる制約条件について，言語内的および言語外的という 2 つの観点から見てみよう。

6.4.1. 言語内的制約条件

まず，言語内的制約条件について分析する。

ンとナイの使用には，下接語の有無や人称，ムードなどによる明確な使い分けはみられない。そこでここでは，活用の行別に分類してみた[8]。それを，ラ行五段とそれ以外の行とに大別してみると，表 7 のようになる。

表 7　活用行別のン／ナイ使用

	LF		NS		全体	
	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ
ラ行	113 (73.4)	41 (26.6)	78 (58.2)	56 (41.8)	191 (66.3)	97 (33.7)
非ラ行	53 (41.4)	75 (58.6)	8 (17.0)	39 (83.0)	61 (34.9)	114 (65.1)

*「非ラ行」は「ラ行以外の行」という意味である。
*数字は使用数（使用率）。

表 7 から，ンが特にラ行五段動詞の場合に用いられる傾向があることが読み取れる。

なぜラ行五段動詞にンが用いられやすいのだろうか。それは，ンがラと結合してひとつの形態素となり，ラ行五段動詞の否定形が「～ラン」とみなされたためではないかと考えられる。このようなことが特にラ行五段動詞にみられるのは，ラ行五段動詞が動詞の形式上のプロトタイプで

あり[9]，それだけ使用頻度が高いためであろう。

6.4.2. 言語外的制約条件

次に，ドメイン内におけるンとナイの切換えにかかわる言語外的制約条件について見てみよう。

まず，〈LF ドメイン〉についてである。

ンとナイの切換えには，明確な規則性が見出されないが，相手のことばを受けてそのまま繰り返す場合にンをナイに切換えるような使用が，S・K に観察された。

(14) S：あのミルクに書いてるんだ。ミルクの上に。あれ足ラン。 〔LF 談話 SN〕

(15) S：あの栄養分が足ラン。ん。 〔LF 談話 SN〕

(16) N：いえー，この三人に二十四万一年，三十も足ラナイ。

S：そんなの足ラナイ。え，え。goa まだ現金多いよ。goa あのだけ，利息だけまだ相当あるのよ。だから，この子供もしも奥さんもモラワナイ，*babahei*[奥さん]モラワナイだろう。そこで頭入れてるなんだよ。 〔LF 談話 SN〕

(17) K：金，金要ラン，金要ランか？

O：あれー[あの運転手さんは]私の金要ラナイよ。

K：はっ↑金要ラナイ。

O：{笑} 友達でしょ。 〔LF 談話 KO〕

S は(16)に示す発話の前に(14)(15)のように「足ラン」などンを多く使用しているが，(16)では相手の N の発話（足ラナイ）を受けてそのまま繰り返している。そして，その後もナイ（モラワナイ）を使い続けている。また，発話例(17)では，K が「要ラン」で質問したのに対して，O は「要ラナイ」と返答した。その返答を受けて K も「要ラナイ」に切換えている。

このように相手の使用を受けて相手と同じ語形に切換えるのは，一種のアコモデーションと考えることができそうである。話し手への配慮や互いの距離感を短縮しようという思いが言語的アコモデーション（この場合はン→ナイの切換え）として現れたのではないかと考えられる。なお，逆のナイ→ンの切換えはみられなかった。

次に〈NS ドメイン〉について見てみよう。

〈NS ドメイン〉における S のンの使用には，言語外的要因がかかわっている。例えば，次のようなンの使用がみられる。

(18) S：ん，[父親が96歳で]なくなったなんだ。ふん。あれ今で，日本当時から，日本のアルコ，あの，△煙糖会社でね，あのー，あれコーチョー[係長]なった。

NS：うん。

S：そすると，[製糖会社づとめの父親は]ちゅう，中華民国なってもやっぱコーチョーなん

だよ。上ガラン[昇進しない]わけなんだ。「どうしてか」って，あの，「国民党は入りなさい」と。「国民党入ったらすぐ課長ならせる」。僕のおやじ，とっ，に，日本精神だからね，「必要ない」って。[略]　〔NS談話S〕

(19) S：だから，年のとったそのーーーーアミ族ねhõ，聞キ取ランから，蕃語で言う。まだすこし，約，今約，八十歳以下な人間，おー，一流よー，日本語はね。

〔NS談話S〕

発話例(18)は，否定辞ンの使用は2つのトピックのつなぎの部分（「日本統治時代」▶「光復後」）にみられる。また，(19)では，否定辞ン使用の前の節において，ことばを探すための言いよどみがみられる（言いよどみの部分は談話例において……で示した）。これらは，新しいトピックの導入や単語の選択に伴う発話管理に集中し，注意度が低下した結果，ンからナイへの切換えといったスタイル面での処理を行うことができなかったものと考えられる。

6.5. インフォーマントの否定辞の使用意識

以上，否定辞ンとナイの使用実態について考察してきたが，次に，インフォーマントたちにとって，ンとナイは，それぞれどのような待遇価値を持っているのか見てみよう。

〈NSドメイン〉におけるインタビュー調査の一環として，インフォーマントにンとナイとの使い分け意識について尋ねた。なお，NS調査者がインフォーマントに対して初めて行うインタビューで否定辞ンとナイの使い分け意識を聞くと，インフォーマントがそれを意識して不自然な使用になりかねないと考え，否定辞ンとナイの使い分け意識に関する調査は2回目または2回目以降に行ったインタビューにおいて行うことにした。ただし，Oの場合のみ初回の調査で聞いた。なお，Yに対しては意識調査を行っていない（Yの健康状態が優れないためである）。

質問は主に次の2点である。

(a) 一段・カ変・サ変動詞にンを使うかどうか（食ベル・来ル・スルなど動詞を挙げながら質問した）

(b) 五段動詞にンを使うかどうか（「『ワカラン』と『ワカラナイ』をご存じですか。なにか違いを感じませんか」などのように各行の動詞を挙げながら質問した）

その結果，(a)については全員が一段・カ変・サ変動詞にンを「使用しない」と回答し，さらにTとC以外は「聞いたこともない」とも述べている（TとCは「セン・読メン」などわずかな数の動詞について聞いたことがあると内省している）。一方，(b)については，「ナイ専用型」と「ナイ・ン併用型」とで異なる。以下では，「ナイ専用型」と「ナイ・ン併用型」に分けて見ていく。

6.5.1.「ナイ専用型」インフォーマント

「ナイ専用型」のLは五段動詞にンを「使用しないし，聞いたこともない」と言っている。Cは，「帰ラン・要ラン・ワカラン」を偶に聞くが使用しない，ほかの動詞については聞いたことはないと内省している（2005年11月補足調査）。さらに，Cは「帰ラン・要ラン・ワカラン」に

関して「荒い，ダサい，労働者が使う」ことばであると，マイナスのイメージを抱いている。

なお，下記の発話例(20)など実際の談話を見ていると，Ｌは相手が使用したンの意味を正しく理解しているように見受けられる。ＬもＣもンを使用語彙ではなく理解語彙として持っているのだといえよう。

(20) Ｙ：{笑} 最初行った時やっぱりワカランだろ↑。
　　Ｌ：そうらしいよ。　〔LF談話ＬＹ〕

6.5.2.「ナイ・ン併用型」インフォーマント

「ナイ・ン併用型」Ｔ・Ｓ・Ｋ・Ｏ・Ｈのンとナイの使い分けに関する意識はどのようなものだろうか。次の発話例(21)(22)(23)(24)(25)はインフォーマントたちの意識を知る手がかりとなる。

(21) Ｋ：[略]「ワカラン」はちょっともう，もうことばにならない[まともなことばではない]。「ワカリマセン」[を使うべきだ]。　〔2003年２月調査〕

(22) NS：ん。じゃー，あのー，「ワカラン」とゆう言い方をする人は，
　　Ｓ：ほとんどこの田舎の人よ。　〔2003年２月調査〕

(23) Ｔ：「ワカラナイ」も，ほ，まいに，平常なことばは，「ワカラナイ」というのは，「ワカリマセン」，これはもう上等な，あ，人に言うでしょ，「ワカラン」，主に「ワカラン」だな。[平常なことばは「ワカラン」である。「ワカラナイ」「ワカリマセン」は上等な人(目上)に言う。]　〔2005年11月補足調査〕

(24) Ｒ：「買ワン」は言いますか。
　　Ｔ：ある。「買ワン」はある。平常使ってる。「買ワン」，「買ワン」。
　　Ｒ：そうですか。物を買ワン。
　　Ｔ：ん。
　　Ｒ：「買ワナイ」は言い，
　　Ｔ：えー＃＃に，上等なことばは「買ワナイ」とゆう，ん。
　　Ｒ：んー，で，「買ワン」は，
　　Ｔ：荒いことばよ。　〔2005年11月補足調査・Ｒは筆者〕

(25) Ｏ：えっ，でぃ，自分のー，考え方よ。あこれ，あーこれこんなこんな。おそう，はや，早いなったらもう「ワカラン」とゆってる。
　　NS：はいはいはい。
　　Ｏ：あ，遅いなったら，やっぱり「ワカラナイ」とゆっとるよ。　〔NS談話Ｏ〕

発話例(21)で，Ｋは「ワカラン」はまともなことばではなく，「ワカリマセン」を使うべきだという旨のことを言っている。これは質問文のワカランとワカラナイとの違いに対する直接の答

えにはなっていないが，このコメントから，Kが否定辞ンをぞんざいな形式と捉えていることがわかる。Sもンを田舎の人が使うものでぞんざいな形式だと捉えている（発話例22)。また，発話例(23)(24) およびTのほかの発話から，Tはナイ・マセンは目上に対して使う丁寧な形式で，ンは「簡単な，荒い，目下に使う」形式と意識していることがわかる。

発話例(25)の「早く話す時は『ワカラン』，遅い場合は『ワカラナイ』」というOの回答から，「ワカラナイ」は意識しないと使えない形式である可能性があると推測できる。「ワカラン」のほうが自然に出てくるということは，切換えのベースとなるスタイルがンを含むものであるということである。Hも発話例(25)と似たような発言をしている。

T・S・K・O・Hのどのインフォーマントも否定辞ンを方言形式だとは思っていないようである[10]。しかし，KやS,Tのように，否定辞ンをぞんざいな形式，田舎の人が使う形式，荒い形式と捉え，〈LFドメイン〉で使うが〈NSドメイン〉になるとナイへの切換えが行われるのは，否定辞ンが方言形式であることに由来していると考えられる。すなわち，ンを特定の地域と結び付けてはいないが，インフォーマルな形式として捉えているインフォーマントの使用意識は，ンがもともと持っていた方言的特質の投影と見ることができるのである。

7. まとめ

以上本稿では，談話データを用いて，台湾花蓮県在住の高年層8人の日本語にみられる否定辞「ナイ」と「ン」の運用の実態について考察してきた。その結果，次のようなことが明らかになった。

(a) インフォーマントは「ナイ専用型」(C・L)，「ナイ・ン併用型」(T・S・K・Y・O・H)にわかれる。

(b)「ナイ・ン併用型」は，

(b−1) 全員「一段・カ変・サ変動詞でナイを専用，五段動詞でンとナイを併用」する。

(b−2) 五段動詞におけるンとナイの使い分けについては，

(b−2−1) ［ドメイン間切換え］〈LFドメイン：ン〉，〈NSドメイン：ナイ〉という切換えが話者T・S・Kに観察される。

(b−2−2) ［ドメイン内切換え］

(b−2−2−1) ［言語内的制約条件］〈LFドメイン〉内も〈NSドメイン〉内も，全般的にラ行五段動詞にンが用いられやすい傾向が見出される。

(b−2−2−2) ［言語外的制約条件］〈LFドメイン〉では，話し相手へのアコモデーションでン→ナイへの切換えが行われることがある。〈NSドメイン〉では，注意度の低下によってン→ナイへの切換えが行われないことがある。

これらは，ナイとンがインフォーマントの中で接触した結果生じたものである。「ナイ専用型」は単純化の一種と考えられるが，「ナイ・ン併用型」は，棲み分け的な再編成が行われた結果である。すなわち，否定辞ンとナイが競り合った結果，ンが一段・カ変・サ変動詞から先に消滅し

て，五段動詞にしか残らなくなった。五段動詞の中では特にラ行に使われやすい。ンは消滅に向かい，その順は「一段・カ変・サ変動詞→ラ行以外の五段動詞→ラ行五段動詞」であると推測される。ラ行五段動詞にンが用いられやすいのは，ンがラと結合してひとつの形態素となり，ラ行五段動詞の否定形が「～ラン」とみなされたためと考えられる。

「ナイ・ン併用型」において，ンをドメインによってナイに切換えられるのは話者T・S・Kのみで，ほかのY・O・Hにおいては切換え能力の喪失が起こっている。ンとナイを切換えているかどうかは，インフォーマントの日本語能力とかかわっているのである。

〈LFドメイン〉でンを使うが〈NSドメイン〉になるとナイへの切換えが行われることから，ンがもともと持っていた方言的性質がインフォーマル形式に転換し，活用されている様相を観察することができる。

このように，否定辞ンとナイの使用は複雑な様相を呈している。しかし，インフォーマントによってその変容のあり方に違いはあるものの，いずれも日本語母語話者が方言形式として用いるそれとは異なり，インフォーマントたちが使用しているンは方言色を帯びていないという共通点を指摘することができる。

今回はケーススタディー的に花蓮県在住の高年層8人を対象に，否定辞について考察を行ったが，ほかの地域の高年層，および，ほかの言語項目に対する調査・分析も進めていかなければならない。また，日本国内の方言使用の実態[11]と比較することで，台湾における日本語の特徴がより鮮明になってくるはずである。これらはいずれも今後の課題である。

注

1 発話例の表記については，日本語を漢字かな混じり，閩南語を英字小文字（教会ローマ字を参考に，部分的にIPAを活用），アミ語を英字小文字イタリックで記すが，議論に関連する形式はカタカナで示す。また，上昇イントネーションは，疑問を表す場合「？」を，そうでない場合「↑」を付す。△は地名，＃は聞き取れない箇所，｛　｝内は非言語行動，［　］内は筆者による訳や注記を示す。

2 〈LFドメイン〉の話者同士は，隣人同士や元同僚といったふだんから頻繁に接触のある人たちである。その談話収録には2種類のものがある。ひとつは，薬店を経営しているインフォーマントC・L夫婦と客との会話を録音したものである。Cにテープレコーダーを店頭で回してもらうように依頼した。もうひとつは，インフォーマントの協力を得て，いつも日本語で会話を交わすような（母語が異なる）友人宅を訪ねてもらい，そこでの会話を録音したものである。いずれもインフォーマントがふだん使用しているスタイル，もしくはそれにきわめて近いものが収録できたと考えている。

3 〈NSドメイン〉はすべて初対面の日本人とのインタビューという設定である。現地調査に際し，インフォーマントT・K・Hには1946年生まれの日本人男性，C・S・Y・O・Lには1973年生まれの日本人男性がインタビュー調査に当たった。2人の調査者はいずれもインタビューの専門知識を持っており，調査時は標準語の丁寧体で話した。本来ならすべてのインフォーマントに対して同じ日本人調査者がインタビューを行うのが理想的であるが，現地調査ではインフォーマントとの面談時間に制約があり，やむを得ず2人の日本人調査者に依頼することにし

た。ただ，継続調査として，K・Hに対して1973年生まれの調査者が調査を行った。その結果，K・Hとも1946年生まれの調査者のインタビューを受けた際と同じようなスタイルで話したことがわかった。したがって，調査者の年齢がインフォーマントの言葉遣いに与えた影響は少ないと判断でき，インフォーマントにとって大切なのは話し相手が日本人であるか台湾人であるかということなのではないかと考えられる。

4　第3節で述べたように，インフォーマントが家族や同じ母語を持つ友人と日本語で話すこともある。そのような場合では，母語と日本語とをコード切換えしながら会話を進行させることが多い。その切換えはどのように行われており，そこで使われている日本語はどのような特徴がみられるのかたいへん興味深いものがあるが，その考察は今後の課題とする。本稿では，インフォーマントの母語がコードとして取り込まれない〈LFドメイン〉と〈NSドメイン〉に焦点をあてて考察を行う。

5　インフォーマントの日本語能力については，実際の談話データを日本語母語話者2人に同時に聞かせて判定してもらった結果，および，筆者の判定の結果の両者を総合して判断されたものである。

6　一段・カ変・サ変動詞がンを嫌う理由については，後接する要素の予測性がかかわっているのではないかと思われる。すなわち，否定形の派生は動詞の未然形に否定辞をつけて作られるのだが，五段動詞と一段動詞とを比較してみると，それぞれの未然形（例えばワカラ，起キ）の次に来る単語の予測性が異なる。五段動詞の未然形（ワカラ）はその後に否定（ン・ナイ）が来ることがすぐわかるが，一段動詞の場合（起キ）はその後に否定（ン・ナイ）のほかにも肯定（ルやマス）や過去（タ），意志（ヨウ）などさまざまな形式が続く可能性がある。こういった環境においては，聞こえ度の弱いン（ンはただ単に鼻音化した母音ぐらいにしか聞こえない）が避けられやすいのだと考えられる。ただし，このことの妥当性についてはさらに検証する必要がある。

7　簡(2002)では，Sは〈LFドメイン〉において「一段・カ変・サ変動詞にナイ，五段動詞にン」といった相補的な運用をしていると述べたが，その後データ量が増えることによって，この制約条件が崩れることになった。

表8－1　〈LFドメイン〉における活用行別のン／ナイ使用

	T		S		K		Y		O		H		計	
	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ
カ行	12	3	5	5	1	9	0	3	0	2	3	1	21	23
サ行	3	4	2	0	1	2	0	3	1	1	0	0	7	10
タ行	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
ナ行	0	0	0	0	0	2	0	0	0	4	0	0	0	6
マ行	0	0	4	3	0	2	0	1	0	6	17	5	21	17
ラ行	**23**	**7**	**17**	**1**	**7**	**2**	**26**	**16**	**10**	**12**	**30**	**3**	**113**	**41**
ワ行	2	3	0	4	2	2	0	5	0	3	0	2	4	19

表8－2　〈NSドメイン〉における活用行別のン／ナイ使用

	T		S		K		Y		O		H		計	
	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ	ン	ナイ
カ行	1	4	3	7	0	1	0	0	0	6	0	0	4	18
サ行	0	2	0	0	0	0	0	0	0	3	0	0	0	5
タ行	0	0	1	0	0	0	0	0	0	0	0	0	1	0
ナ行	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0	0
マ行	0	0	0	1	0	1	0	0	0	2	0	0	0	4
ラ行	**9**	**7**	**9**	**5**	**0**	**5**	**6**	**6**	**34**	**32**	**20**	**1**	**78**	**56**
ワ行	0	0	3	5	0	4	0	0	0	3	0	0	3	12

8 〈LFドメイン〉〈NSドメイン〉におけるインフォーマントの活用行別のン／ナイの使用数は表8－1，表8－2のとおりである。

9 古典語のばあい，四段動詞におけるラ行の割合は約3分の1であるが（宮島他 1982：343，ただし当該記事は慶野1972を出典とする），現代語でもほぼ同じだと思われる。また，「ラ行五段動詞が動詞の形式上のプロトタイプであることは，新たに生まれるサ変以外の動詞（サボル・江川ルなど）がどのような形式と活用のタイプをとるかを見れば理解できる」（渋谷 1993：188）。

10 これは，もとは方言形式として認識されていた否定辞ンが日本人との接触が絶たれたことによってその方言色を失っていったためかもしれないし，当初からンは方言形式だと認知されていなかったためかもしれないが，今となってはそれを知るすべはない。

11 奄美の高齢層が話す標準語でも，否定辞の使用について台湾日本語と似た傾向（五段動詞にン，非五段動詞にナイを多用する）がみられる。これは，大阪大学大学院文学研究科の授業「社会言語学演習」（真田信治教授）の活動として行われたフィールドワークでのデータから明らかになったことである。

参考文献

川見駒太郎(1942)「台湾において使用される国語の複雑性—附，方言の発生—」『日本語』3，32-39，日本語教育振興会

簡月真(2002)「台湾に残存する日本語にみられる方言的要素—存在動詞オルと否定辞ンを中心に—」『日本方言研究会第75回研究発表会発表原稿集』9-16，日本方言研究会

簡月真(2005)「共通語として生きる台湾日本語の姿」『国文学解釈と鑑賞』70(1)，197-210，至文堂

慶野正次(1972)『動詞の研究』笠間書院

斉藤義七郎(1939)「台北市児童の方言」『国語研究』7(1)，26-31，国語学研究会

酒井恵美子(1996)「台湾タイヤル族の日本語—共通語形と非共通語形の使用について—」中條修編『論集言葉と教育』311-322，和泉書院

渋谷勝己(1993)「日本語可能表現の諸相と発展」『大阪大学文学部紀要』33(1)，大阪大学

台湾総督官房臨時国勢調査部(1937)『昭和十年国勢調査結果表』(2000年文生書院再版)

都留長彦(1941)「台湾方言について」『国語の台湾』創刊号，29-31，国語の台湾社

西岡英夫(1936)「台湾と方言（二）」『声音教育』3(1)，79-83，声音教育研究会

前田均(1989)「アミ語（高砂諸語）の中の日本語」『山辺道』33，134-143，天理大学国語国文学会

宮島達夫・野村雅昭・江川清・中野洋・真田信治・佐竹秀雄編(1982)『図説日本語—グラフで見ることばの姿—』角川書店

Fishman, J. (1964) Language maintenance and language shift as a field of inquiry, *Linguistics* 9, 32-70.

Weinreich, U., W. Labov and M. Herzog (1968) Empirical foundations for a theory of language change, In Lehmann, W. P. and Y. Malkiel (eds.) *Directions for historical linguistics*, 95-188, Austin, TX: University of Texas Press.

付　記

本稿は，大阪大学大学院文学研究科平成15年度博士論文「台湾に残存する日本語の実態」の内容の一部をもとに加筆・修正を施したものです。フィールドワークにご協力いただいたインフォーマントの方々，そして原稿作成に際しご教示くださった方々に，心より御礼申し上げます。

（投稿受理日：2005年 8 月22日）
（最終原稿受理日：2006年 3 月27日）

簡　月真（かん　げっしん）
国立東華大学原住民民族学院
台湾　974　花蓮県寿豊郷志学村大学路 2 段 1 号
sun0912@hotmail.com

Japanese Linguistics 20 (October, 2006) 5–25 〔Article〕

Negation *-nai* and *-n* in Taiwan Japanese:
The case of Hualien prefecture

CHIEN Yuehchen
National Dong Hwa University, Taiwan

Keywords
Japanese in Taiwan, lingua franca, Japanese dialects, language contact, reconstruction of language system

Abstract

This paper attempts to describe the linguistic nature of Japanese as a lingua franca in Taiwan through examining the usage of negative forms. The analysis is based on data from naturally occurring conversations by eight elderly Taiwanese speakers of Japanese in Hualien prefecture.

The results show that in Taiwan Japanese, both *-nai* (Standard Japanese form) and *-n* (Western Japanese dialectal form) are used. *-Nai* is used with all vowel stem verbs, whereas *-n* is used only with consonant stem verbs. Individual differences do exist, and the use of *-n* also differs in respect to the conjugation type of the consonant stem verbs. It may be inferred from the variation between informants that *-n* has been disappearing in the following order: vowel stem verbs → consonant stem verbs not ending with *-r* → consonant stem verbs ending with *-r*. It was also observed that some informants used *-n* in the domain where Japanese was used as a lingua franca, and shifted to *-nai* when speaking with the interviewer, a native speaker of Japanese. This usage leads to the conclusion that *-n* is regarded as an informal form, which may be due to its inherent nature as a dialectal form. However, as informants with lower Japanese proficiency did not use this type of style shift, there is an interrelation between style-shifting and language proficiency.

The system which developed in Taiwan Japanese for negation provides an interesting example of linguistic change that may occur when certain dialectal forms are transplanted to a different linguistic region.